

新潮文庫

人物日本史 明治・大正

—時代小説大全集 5—

新潮社 編



新潮社

じんぶつ にほん し めいじ たいしやう
人物日本史 明治・大正

—時代小説大全集 5—

新潮文庫

し - 22 - 14



平成三年九月二十五日 発行

編者 新潮社
監修 縄田一男

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)三二六六―五一一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Kazuo Nawata & Shinchosha 1991 Printed in Japan

ISBN4-10-120814-X C0193

江苏工业学院图书馆

人物日本史 明治 大正

藏書章

新潮社編



新潮社版

目次

軍人・政治家

野に死する魂●西郷隆盛……………津本陽九

大久保利通……………奈良本辰也三

憂鬱な英傑・木戸孝允……………南條範夫九

博文暗殺●伊藤博文……………三好徹二

旅順攻囲軍●乃木希典……………木村毅一四

社会・文化

福沢諭吉……………安岡章太郎一七

三野村利左衛門……………邦光史郎一八

阿修羅の妻●南方熊楠……………杉本苑子二七

事件・世相

毒婦の皮——高橋於伝刺青譚	高木彬光	二七
帶勲車夫●陸奥宗光・津田三蔵	井上ひさし	二九
波荒し玄洋社●頭山 満	尾崎士郎	三〇
四分割秋水伝●幸徳秋水	山田風太郎	三七
社会主義者を殺せ！●大杉 栄	杉森久英	四五

芸術・スポーツ

三遊亭円朝	森 銑三	五〇
樋口一葉と「萩の舎」	巖谷大四	五五
松井須磨子	戸板康二	五九
風雲児 沢田正二郎	樋口十一	六九
嘉納治五郎	戸川幸夫	五八

時代小説大全集 5

人物日本史 明治・大正

軍人・政治家

野^の
に
死^し
す
る
魂^{たましい}●
西^{さい}郷^{ごう}隆^{たか}盛^{もり}

津^つ
本^{もと}

陽^{よう}

へコ帯姿で犬を連れた上野の銅像でおなじみの西郷隆盛は、その体軀たいくそのままの“大人物”というイメージで、今なお根強い支持を得ている歴史の人気者の一人である。

西郷の人気秘密とは、討幕に示した実際的な政治力にもかかわらず、維新後、西南戦争の引き金を引き、最大の反逆者となった悲劇のヒーローとしての側面と、子孫のために美田は買わぬというエピソードが示す様に、その清廉せいれんさが、いつの世でも権力や金に執着する政治家への一つのアンチ・テーゼとなっている点にあらう。

西南戦争で戦死した後も、実は西郷は生きていて、中国へ潜伏したとも、インドの島に隠れているとも、はたまたロシアに渡ったとも様々な憶測が乱れ飛んだ。

この作品は、西郷の“敬天人愛”の死に場所を求めて在野にこれを得るまでを描いた秀作である。

一

鹿児島市城山の頂上から、私学校跡へ下ってゆく山道は、巨木が密生して原始林の趣きを呈している。

行き交う人もまれな坂の途中、雑草のなかに黒ずんだ石碑が立っている。低い路面から見上げると、一段高い場所にある碑の表面には、流麗な文字が記されていた。

「わが祖父もわが父もまたしたがひぬ。みいのちの山に立ちてなみだす」

観光コースからはなれた地に寂然と立つ板碑に刻まれているのは、明治十年の戦役に、西郷隆盛に殉じて死んでいったますらおたちへの、追懷の思いであった。

三万の壮士たちを死地に従わせた西郷隆盛の魅力は、どのようなものであったのか。鹿児島で、西郷は「ウド目さあ」の愛称で呼ばれていたという。ウド目とは、巨眼の意である。ウド目さあは、また「きれい御免さあ」の代表的な人物であったといわれる。きれい御免さあとは、薩摩武士がつねにそうありたいと心掛ける心境で、その意は命も金も名誉も必要としないとする、身ぎれいな進退をいう。

西郷の一生は「きれい御免さあ」の精神を押し通し、その枠から抜け出られなかった悲劇であったといえよう。

西郷は文政十年（一八二七）十二月七日、鹿児島城下、下加治屋町で誕生した。父は御小姓与、西郷吉兵衛隆盛である。

西郷の家系は後醍醐天皇の忠臣、菊池武時の流れを汲むもので、元禄年間に肥後から薩摩に移り、島津家の臣となった。

御小姓与は、十段階に分けられた城下士の家格のなかでは、下から二番めの輕輩である。知行高は明らかではないが、薩摩藩では、知行権の売買が許されており、西郷家も、隆盛が生れたときは、すでにそれを売却していて、無禄の状態であった。

父の吉兵衛は勘定方小頭を務めていたが、とくに役得もない。長男の隆盛のあとに弟妹が六人も生れ、吉兵衛の父母も健在で、十一人の大世帯である。

家は雨が漏り、一枚のふとんにきょうだい四方から足を突っ込んで寝るといふ貧窮のうちに、隆盛は成長する。彼の思いやりの深さ、政治上の仁政主義、質素を貴ぶ傾向は、幼少時の貧窮のうちに養われたのであろう。貧困は逆境に耐え、難局に挫けない抵抗力を鍛えるものである。

西郷は貧家に育ったが、身分は南朝忠臣の家系である。また、輕輩といっても、薩摩藩二十万人の武士階級のなかで、城下士とその家族の総数は一万二千人ほどであるから、外城士、在村郷士たちに尊敬される身分として、家格は低いとはいえない。

西郷家は窮乏のあぐく、弘化四年（一八四七）と嘉永元年（一八四八）の両年にわたり、水引郷の豪農の家へ、吉兵衛、隆盛の父子そろって借金を頼みに行き、二百両の大金を借りている。豪農は、隆盛の人物を見抜いて大金を貸したが、この借金は知行地を買うためのものであり、た

だの貧乏人とは事情のちがうものであった。

隆盛の育った下加治屋町郷中には、三歳半年少の友、大久保正助（利通）がいた。隆盛は十三歳のとき、子供どうしの喧嘩で腕を傷つけ、剣術修業を諦めた。

正助も体力に恵まれない。二人はもっぱら読書に身をいれ、交友関係はいっそう深まるが、性格はいちじるしく異った。

隆盛の家には商人が出入りすることはなく、商業との関係はまったくなかった。そのため、隆盛の視野には農村の事情はとらえられていたが、そのほかには及ばない。

これにひきかえ、正助の父利世は、琉球付役として、薩藩の植民地で最重要の財源である琉球支配の役所に勤め、砂糖、上布などの交易および、中国との貿易にも携わり、商人との交際も広く行なっていた。

このため、正助には身分格式にこだわらない広い視野がそなわった。

隆盛は身ごなしが鈍重で口が重いが、正助は能弁で機転が利く。正助の母方の祖父皆吉鳳徳は、長崎と江戸で蘭学、医学を学んだ新知識人で、文政六年（一八二三）同志とともに自費で日本最初の三本マストの西洋式帆船伊呂波丸を建造した。

西郷と大久保の才幹と生活環境の相違が、征韓論争から西南役にかけて、対立し合う異った道を選ばせることになるのだが、彼らは少年期、青年期を親友として過ごした。

西郷は弘化元年（一八四四）十八歳で郡方書役助の役をもらい、四石の扶持を受けるようになった。郡方は農村を巡廻して村役人を監督し、年貢を取り立てる役である。奉行の下に書役がある。西郷は書役に昇進して二十七歳まで十年間も郡方に勤めた。

西郷が郡方で最初に仕えた奉行の迫田太次衛門は、民を愛し公平をたつとぶ剛直の士であつた。彼は嘉永二年の凶作の年、秋の作柄検分のため郷村を巡廻するに際し、藩庁からたとえ凶作でも年貢の加減はせぬようにと指示された。迫田はそれでは検分の意味はないと憤り、辞職した。

西郷は郡方の役務を務めるうち、苛酷な租税に牛馬のような環境に置かれている、百姓の実態と、搾取をこととし私腹を肥やす乱れきつた地方役人の横暴を、つぶさに知つた。

西郷の運命は、嘉永四年（一八五二）島津斉彬が、第二十八代藩主の座についたことで、大きく転換する。斉彬は父斉興にうとまれ、四十三歳でようやく家督を継いだが、不世出というに値する英明の君主であつた。

斉興は愛妾お由羅の方に産ませた斉彬の異母弟久光に、太守の座を譲ろうとし、高崎崩れというお家騒動をひき起こしたほどであつたが、幕府の要請で、やむなく我意をひそめたのであつた。斉彬派の人材は、彼の相続をはばむ禍因である久光母子を殺害しようという謀議に連なつたかどで、ほとんどが死罪をこうむり、世を去つていた。

斉彬は領主となつて最初の布告を發した。

「このたび自分が領主になつたが、すべて父の定めた規則に基づいて政を行なう。家中の者は上下とも心をよく通わせ、正道を心掛ける自分を輔佐してもらいたい。すべてに利害得失を考え、万事入念に取りはからつてもらいたい」

また、斉彬は、士民に意見の開陳を求めた。いかなる身分の者でも、政治むきにつき意見があれば、遠慮なく書面で述べてもらいたいというのである。

斉彬は、国学、儒学のほかに蘭学にも詳しい学識を有していた。国内の情勢のみならず、海外

の時勢にも明るい。

彼は統治者として、人材の養成がいかに大切であるかを知っていた。安政の大地震直後に彼はいった。

「老公は天下の大人物といわれているが、その威徳は側近の輔佐によるものだ。今度の地震で藤田東湖と戸田蓬軒が死んだので、今後の水戸家は衰微に向かおう」

斉彬の予言は的中し、斉昭の死後に水戸から人物は現われず、明治維新にも何の功業をも示さなかった。

新藩主となった斉彬の周辺にも、人材は地を払っていた。文化年間に、乱脈な藩政を立て直そうとした、藩老秩父太郎ら一派が、祖父重豪の怒りを買って壊滅していたし、高崎崩れでは、家老島津竜岐以下数十人が切腹、遠島の処分が付されていた。

斉彬は人材の林をなぎ倒された荒野に立たされた自分の周囲に、新しい萌芽を探そうと努力した。施政を行なうにあたり、広く意見書を求めようとしたのも、隠れた人材を発掘したいためであった。

まもなく、斉彬は郡方書役という身分の低い家士が、頻々と提出してくる意見書に眼をひかれるようになった。藩内農政の改革案について、卓見を述べている。

「御国ほど農政の乱れたる所決してござ有まじく、如何にして百姓の伸び立ち候期、ござ候や」西郷は痛烈な口調で、検地役、蔵役の非違をつく。

斉彬は西郷吉之助というその者の名を覚え、安政元年（一八五四）正月、江戸参勤のとき、供のなかに西郷を加えた。